

ハンドボールのセンタープレイヤーの攻撃力の評価

河村レイ子, 大西 武三*, 水上 一*

Estimation of Offense on Center
Player in Handball

Reiko KAWAMURA, Takezo OHNISHI*
and Hajime MIZUKAMI*

Abstract

The Purpose of this study was to obtain basic data for Coaching theory in Handball. In order to estimate the offence in '86,'87 season in Tokyo Women Physical Education College Handball team, the following parameters were used :

1) The Goal average. 2) The succeeded ratio of the offence (S.O) 3) The miss ratio (M). 4) The succeeded ratio of shoot (S.S). 5) The participated ratio of last play (P.L). 6) The succeeded ratio of last play (S.L). 7) The contributed ratio of last play (C.L).

The result were as follows :

1. The Goal average was 24.6, S.O was 41.1% and M was 29.0%.
2. S.S was 54.7%. And most offence type in succeeded goal attempt was the fast break, the cut-in play and the penalty throw.
3. P.L, S.L and C.L in three main players were higher than these of main players in the opposite team.
4. Kim was a center player in this team. Her P.L was 24.4% and her C.L was 8.8. Kim's Assist (90, average:11.3) was higher than that of the opposite center player.

Key words: Handball, Center Player, Participated ratio, Contributed ratio

I 緒 言

ハンドボールの攻撃力を高めるための指導やトレーニングが行われているが、指導者が、チームや個人の攻撃能力を客観的に把握することは、重要な課題である。

ハンドボールの攻撃力の評価に関する研究

には、大西の「ハンドボールプレイヤーの攻撃力の評価に関する一考察」や、杉森の「ゲーム分析からみたハンドボール競技のチーム力評価に関する研究」等がある。これらは、ハンドボールゲームでの攻撃活動から、攻撃の最終プレーをもとに、プレイヤーの攻撃力を評価しようとするものである。

* 筑波大学体育科学系

本研究は、東京女子体育大学チームのゲームの記録をもとに、ハンドボールの攻撃において、ゲームを統率していくコントロールタワーの役割を果たすセンタープレーヤーについて最終プレーだけでなく、アシストパスも含めた攻撃力の評価を行うものである。センタープレーヤーの能力の優劣は、プレーの成否や、ゲームの勝敗に大きく影響するものと思われる。

センタープレーヤーの役割としては、ゲームの状況を適確に把握してゲームメイクをすること、みずからのシュートにより直接得点をあげること、チャンスを作って味方に有効なアシストパスを送ることなどが考えられる。

ここでは、東京女子体育大学チームと筑波大学チームのセンタープレーヤーの攻撃力を比較しながら、センタープレーヤーが、チームの攻撃力にどのように関与しているかを、明らかにしようとするものである。

II 研究方法

1. 対象

関東地区大学女子ハンドボール連盟に所属する東京女子体育大学チームと筑波大学チームの、昭和61年度及び62年度の公式試合の中から、2チームが対戦した8試合を対象に調査を実施した。大会名は、関東女子学生ハンドボール春季リーグ戦・東日本学生ハンドボール選手権大会・関東女子学生ハンドボール秋季リーグ戦・全日本女子学生ハンドボール選手権大会である。

2. 方法

対象となった8試合をVTRに収録し、後日再生し、チーム及び個人の攻撃における最終プレーとセンタープレーヤーのアシストパスを中心に記録をとり、表1に示す大西の考案した算出式より、最終プレー依存率、最終

プレー成功率、最終プレー貢献度を求めた。最終プレーとは攻撃権を失うプレーで、フィールドシュートゴールイン、フィールドシュートノーゴール、ペナルティー獲得、ミスの4つである。

表1 算出式

$$\text{攻撃成功率} = \frac{\text{シュート総数}}{\text{攻撃回数}} \times 100$$

$$\text{シュート成功率} = \frac{\text{得点}}{\text{シュート総数}} \times 100$$

$$\text{最終プレー成功率} = \frac{\text{個人の成功プレー総数}}{\text{個人の最終プレー総数}} \times 100$$

$$\text{最終プレー依存率} = \frac{\text{個人の最終プレー総数}}{\text{チームの最終プレー総数}} \times 100$$

$$\text{最終プレー貢献度} = \frac{\text{個人の最終プレー成功率}}{\text{チームの最終プレー総数}} \times 100$$

またアシストパスについては、センタープレーヤーのアシストパス数・パスの動作・パスコース等を私案の用紙に記入した。

III 研究結果と考察

1. チームの成績

表2は両チームの攻撃の全体像を表わしたものである。勝敗数は東京女子体育大学チーム（以下Aチームとする）が7勝1敗、筑波大学チーム（以下Bチームとする）が1勝7敗と、対戦成績では、Aチームが優位を占めている。Aチームは、昭和61年度・62年度の学生チャンピオンチームであり、また62年度の全日本チャンピオンチームでもある。

両チームの得点を比較すると、Aチームは総得点197点、Bチームは157点と、40点の差となる。1ゲーム当りでは、Aチームは24.6点、Bチームは19.6点となり、5点の差であった。

また、チームの攻撃成功率では、Aチーム

が41.1%， Bチームが32.3%と約10%のひらきがみられた。ミス数では1試合平均， Aチームが17.4回， Bチームが22.5回で， 全攻撃回数に対する割合， 即ち， ミス率で言うと， Aチーム29.0%， Bチーム37.0%となる。Aチームのミス数・ミス率は， 昭和61年度に杉森¹⁾が調査した， 大学男子のミス数18.4回， ミス率29.2%という結果と比較しても， 劣るものではないことがわかる。

2. チームの攻撃内容

表3は両チームの攻撃， 特にシュートについての資料である。両チームのポジション別シュート数・ゴールイン数から， 各ポジションでのシュート成功率， フィールドシュート全体に占める各ポジションでのシュートの割合について表わしたものである。

シュート総数は， Aチーム360回， Bチー

ム322回と， 全体ではAチームが38回多い。また， シュート成功率は， Aチーム54.7%， Bチーム48.8%と， Aチームの成功率の方が高かった。

どの区域からの攻撃を得意とするかは， チームのオフェンス戦術によるところも大きいですが， A・B2チームの得点状況を見てみると， Aチームは， 得点の多い順に， 速攻， カットイン， ペナルティースロー等のシュート成功率の高いプレーでの得点が， 全得点の61.4%を占めている。一方Bチームは， シュート成功率が他に比べて低い， ロングシュートによる得点がトップで， 速攻， サイドからの得点がそれに続いている。

全フィールドシュートに占める割合では， A・B両チームとも， ロングシュートが最も多用されていた。

表2 チーム成績

		攻撃回数	シュート総数	得点	シュート成功率	ミス数	ミス率	攻撃成功率
東女 体大 N=8	全試合	479.0	360.0	197.0	54.7	139.0	29.0	41.1
	1試合平均	59.9	45.0	24.6	—	17.4	—	—
	S・D	4.0	—	4.4	—	3.4	—	—
筑波 大学 N=8	全試合	486.0	322.0	157.0	48.8	180.0	37.0	32.3
	1試合平均	60.8	40.3	19.6	—	22.5	—	—
	S・D	4.4	—	3.1	—	3.2	—	—
大学 男子 N=108	1試合平均	62.6	—	23.9	—	18.4	29.2	38.2
	S・D	7.9	—	5.4	—	5.9	—	—

表3 チームの攻撃内容

		ポスト	サイド	ロング	カットイン	リバウンド	フリースロー	速効	フィールドシュート計	ペナルティスロー	シュート総数
東女 体大	シュート数	31.0	49.0	88.0	60.0	4.0	11.0	76.0	315.0	45.0	360.0
	得点	23.0	17.0	29.0	41.0	2.0	5.0	46.0	163.0	34.0	197.0
	シュート成功率	74.2	34.7	33.0	68.3	50.0	45.5	60.5	51.7	75.6	54.7
	フィールドシュートに占める割合	9.8	15.6	27.9	19.0	1.3	3.5	24.1	—	—	—
筑波 大学	シュート数	22.0	57.0	129	35.0	3.0	12.0	42.0	300.0	22.0	322.0
	得点	16.0	26.0	41.0	24.0	2.0	3.0	28.0	140.0	17.0	157.0
	シュート成功率	72.7	45.6	31.8	68.6	66.7	25.0	66.7	46.7	77.3	48.8
	フィールドシュートに占める割合	7.3	19.0	43.0	11.7	1.0	4.0	14.0	—	—	—

3. 個人の攻撃内容

2年間にわたり、メンバーに移動がみられなかった両チームの、センター、フローター、ポスト、サイドの4つのポジション、合計8人のプレーヤーの攻撃力の評価を行った結果が、表4である。

プレーヤーが、チーム全体の最終プレーにどの程度関与していたかを示す最終プレー依存率では、Aチームのセンター、金選手の21.4%、サイドの柳選手の20.8%が際立って高く、杉森¹⁾の調査による大学男子プレーヤーの依存率の平均値、センター15.2%、サイド15.1%より高い値を示していた。

最終プレー成功率では、Aチームの主力4人の成功率の平均が44.7%、Bチームの平均が34.3%と、約10%の差が認められる。

チームの最終プレーの総数に占める個人の成功プレー数の割合を示す最終プレー貢献度は、Aチーム金選手が8.8、柳選手8.4と、他に比べて高い値を示し、これは杉森¹⁾の調査による大学男子プレーヤーの平均値、センター5.1、サイド6.6と比較しても、高い貢献

度を表わしていることがわかる。

この2名の選手は、他の選手に比べて形態的には大きな相違はみられないが、韓国元ナショナルチームの選手として、多くの国際試合を経験し、優れた技術を有していることが、この数値からも判断することができる。

各ポジション別に、両チームの選手を比べてみると、ポストの最終プレー依存率・貢献度を除いて、Aチームの選手の値が、Bチームの値を上回っていた。Aチームは、センタープレーヤーを中心に、主力3選手の攻撃力の高いチームということが出来る。

また両チームのセンタープレーヤーの攻撃力を比較してみると、シュート成功率、最終プレー依存率、最終プレー成功率、最終プレー貢献度とも、金選手の方が優れていた。

表5にセンタープレーヤーの攻撃内容を示した。金選手は相川選手の2倍の得点をあげている。その得点区域を見ると、両選手とも、ロング、カットインが中心ではあるが、金選手の場合には、リバウンドを除くその他の全ての区域から得点をあげている。ハンドボー

表4 ポジション別個人差評価

		シュート数	シュート成功率	最終プレー依存率	最終プレー成功率	最終プレー貢献度	ミス数
東女 体大	センター 金	77	49.4	21.4	41.1	8.8	25
	フローター 鈴木	104	55.8	15.8	45.6	7.2	7
	サイド 柳	69	50.7	20.8	40.4	8.4	28
	ポスト 北島	28	75.0	11.2	51.8	5.8	20
筑波 大学	センター 相川	44	43.2	13.0	31.3	4.1	19
	フローター 磯山	42	33.3	12.6	24.2	3.0	19
	サイド 三宅	51	54.9	16.6	37.8	6.3	28
	ポスト 中嶋	40	70.0	15.2	44.0	6.7	30

表5 センタープレーヤーの攻撃内容

			全得点	ポスト	サイド	ロング	カットイン	リバウンド	フリースロー	速攻	ペナルティスロー
東女 体大	金	得点	38	1.0	1.0	16.0	10.0	0	4.0	3.0	3.0
		シュート全体に占める割合	—	2.6	2.6	42.1	26.3	0	10.5	7.9	7.9
筑波 大学	相川	得点	19	0	1.0	8.0	8.0	0	0	2.0	0
		シュート全体に占める割合	—	0	5.3	42.1	42.1	0	0	10.5	0

ルのゲームでは、1ゲームを通して同一のポジションに固定してプレーすることはなく、ゲームの状況に応じて逐次ポジションの移動をとまなうことが多いためであろう。

4. アシストパス

センタープレーヤーのもう一つの重要な役割といえるアシストパスについての調査結果が表6である。ここではシュートに達した直前のパスのみをアシストパスとして、パスの回数、パスの方法、パスのコース等についてまとめた。

まずパスの回数を見ると、金選手は全試合で90回、1試合当たり11.3回、相川選手は全試合で46回、1試合当たり5.8回と、パス数では金選手が相川選手の約2倍となっている。アシストパスを受けてのシュート成功率は、どちらも60%近い値であった。

アシストパス時の足の動作では、両センターともステップパスを最も多く行っており、ランニングパス、ジャンプパスがそれに続いている。パス時の手の動作では、70%近くがオーバーハンドパスであった。アンダーハンドパスやラテラルパスも10%から15%を占めていた。また回数は少なかったが、金選手は、バックハンドパス、両手パス、サイドハンドパス等の多彩なパスプレーを行っていた。

表7には、両選手のアシストパスのコースを表わした。金選手は、右フローター、ポスト、左フローターへのパス数が多く、相川選手は、右フローター、左フローター、速攻で

表7 アシストパスコース

	金			相川		
	パス数	得点	成功率	パス数	得点	成功率
右フローター	18	13	72.2	14	6	42.9
右サイド	8	4	50.0	3	2	66.7
ポスト	15	13	86.7	6	5	83.3
左フローター	14	7	50.0	10	4	40.0
左サイド	12	4	33.3	4	4	100.0
センター	12	7	58.3	1	1	100.0
速攻	11	8	72.7	8	6	75.0
合計	90	56	62.2	46	28	60.9

のパス数が多かった。全てのポジションで、金選手のアシストパス数が、相川選手のパス数を上回っていた。なかでも金選手のポストへのパスは、パス回数、シュート成功率も高く、有効なパスであることがうかがえる。

IV まとめ

本研究は、昭和61年・62年度の学生ハンドボール界で好成績を収めた、東京女子体育大学チームの試合の記録を、筑波大学チームの記録と比較しながら、ハンドボールの攻撃力の評価を行い、今後のコーチングの基礎資料を得ようとするものである。

調査をもとに検討した結果は以下のように要約される。

- 1) 東京女子体育大学チームの1試合当りの得点は、24.6点で、攻撃成功率は41.1%、ミス率は29.0%であった。
- 2) 東京女子体育大学チームのシュート成功率は54.7%、筑波大学チームは48.8%であった。

表6 センタープレイヤーのアシストパス

	パス数			アシストパス後		パス動作(足)							パス動作(手)		
	運攻	速攻	全体	得点	成功率	ジャンプ	ステップ	ランニング	オーバーハンド	ラテラル	アンダーハンド	サイドハンド	バックハンド	両手	
金	総数	79.0	11.0	90.0	56	62.2	11.0	53.0	26.0	62.0	9.0	13.0	2.0	3.0	1.0
	割合	87.8	12.2	—	—	—	12.2	58.9	28.9	68.9	10.0	14.4	2.2	3.3	1.1
相川	総数	38.0	8.0	46.0	28	60.9	10.0	21.0	15.0	34.0	7.0	5.0	0	0	0
	割合	82.6	17.4	—	—	—	21.7	45.7	32.6	73.9	15.2	10.9	0	0	0

- 3) 東京女子体育大学チームの主力3選手は、最終プレー依存率・成功率・貢献度とも筑波大学チームより高かった。
- 4) 東京女子体育大学チームのセンタープレーヤー金選手の依存率は21.4%で、貢献度は8.8であった。
- 5) アシストパスは、全ポジションで金選手のパス数が、相川選手のパス数を上回り、総数では相川選手の約2倍の90回であった。

これらのことから、東京女子体育大学チームの勝因を推測すると、チームの攻撃成功率が大学男子チームの平均と比較しても高いこと、貢献度が際立って高い2選手がいること、また得点力、パス力に優れるセンタープレーヤーを擁していることなどが考えられる。

参考文献

- 1) 水上 一他：スポーツ新シリーズ，ハンドボール，不味堂，16-25，1985.

- 2) 宇津野年一：最新ハンドボール技術（攻撃編），ベースボール・マガジン社，136，1975.
- 3) 大西武三他：現代スポーツコーチ実践講座7，ハンドボール，ぎょうせい，20-23，170-185，1983.
- 4) 渡辺慶寿他：実践ハンドボール，大修館書店，8-10，1977.
- 5) 宇津野年一：スポーツ入門双書，ハンドボール，ベースボール・マガジン社，98-100，1978.
- 6) イオン・クンスト：ハンドボールの技術と戦術，ベースボール・マガジン社，1981.
- 7) 佐藤 靖：ハンドボール述語に関する研究，山形大学紀要，1988.

引用文献

- 1) 杉森弘幸：ゲーム分析からみたハンドボール競技のチーム力評価に関する研究，筑波大学大学院修士論文，1986.